

を味わわせて欲しい、と神に祈った。すると復讐の女神がこれに応えたのである。ある日、ナルシスは静かな森をただ一人さまよっていたが、どういう訳か道に迷ってしまう。そして洞穴からきれいな清水が湧き出て木陰の下にできた泉までやってくる。喉が渇いていたので、ナルシスは水を飲もうとして泉にかがみ込むと、その表面は鏡のようで、彼の姿が映っていた。しかしナルシスはそれが自身の姿が映ったものとは知らなかった。大昔には鏡の存在がまだなく、神だけが知っていたと思われる。

その結果、ナルシスは水面上の美しい姿に恋をしてしまうのである。自分自身に恋をしたナルシスの悲劇がここに始まった。決して報われない恋であった。彼は水面から動くことができず、とうとうそこで死んでしまう。そして彼を哀れに思った神がいて、死骸から水仙（英語でナーシサス）が咲き出た。ナルシスは水仙の花に変身したのである。現在水仙には約1000種もあり、ラッパ水仙とは異なっている。日本では、越前岬などに咲くもので、一本の茎から白い小さな花がたくさん咲く種を指すと言われる。「自己愛」の意味の「ナルシズム」という言葉はここから生まれたのである。

【終わりに】

以上、花に変身した話を二つ紹介した。考えてみるに、恋は楽しいときは短く苦しいときの方が長いものではないだろうか。恋し愛した人と結ばれてもその喜びは持続しないものだ。持続させるには努力が必要であるし、そのときその愛情は、一瞬に感じた恋の激しい歓喜とは種類が異なったものになる。そして恋とは、意志に関わりなく陥るものであるから、人間の、恋との関係は永遠に続くものである。そして芸術の永遠の源となるのである。

参考：オウィディウス著 田中秀央／前田敬作訳
『転身物語』，人文書院，1966年

60年ぶりに再建なった ドレスデンの聖母教会 (2005年10月30日)

経営学部

島田 了

エルベ河畔のフィレンツェと呼ばれる芸術の街ドレスデンにひととき目立つ建築物があった。プロテスタントの聖母教会である。当時の教会の丸屋根は木組みに銅版をかぶせたものが普通であったが、この教会は丸屋根全体が明るい色の砂岩でできあがっていたのだ。この教会を設計したのはドレスデンの大工長ゲオルク・ベアー、設計当時57歳で経験は豊富だったが、ほとんど無名の建築家だった。彼についてはほとんど資料が残っておらず、肖像画さえ残っていないという。実際、彼に設計を任せるにあたって反対もあったし、妨害もあった。設計が彼に決まってからも、石の丸天井については反対が多かった。しかし彼は粘り強く交渉を続けるなどして、石の丸天井を決してあきらめなかった。そして資金難にも負けず、彼は私財を投じて教会の完成へと努力した。結局、彼は完成前の1738年3月16日に貧困のうちに息を引き取ることになる。しかし彼の主張どおりの石造りの丸屋根は完成し、1743年5月23日の完成以後、その美しくも堂々たる姿から「太った貴婦人」(dicke Dame)の愛称でドレスデンの人々に愛され続けてきたのだった。

この教会は、7年戦争やナポレオン戦争、そして第1次世界大戦にも被害にあわなかった。第2次世界大戦も末期になって、ベルリン、ケルン、ハンブルク、フランクフルトなど他の多くの大都市が爆撃で壊滅的な被害を受けていたときでも、ほとんど被害を受けていなかったのである。

ドレスデンはその文化的価値の高さから爆撃をまぬがれているのではないかと、当時の人びとは思い始めていた。戦闘が激しさを増す東部からは多くの難民が、安全と信じていたこの街に殺到していた。しかしこの美しいバロックの街ドレスデン、その歴史を通じて平和を愛したザクセンの首都も例外ではありえなかった、1945年2月13日、そんな無防備に近い街を連合軍の爆撃機は襲った、第1波は244機、第2波は529機のランカスター爆撃機である。歴史に名高いドレスデン大空襲であった。爆弾による破壊と焼夷弾による大火災で街は一夜にして壊滅し、民間人の死者は2万5千人とも3万5千人ともいわれている。そして人命とともに多くの貴重な文化遺産も消えていった。

聖母教会も例外ではなかった。直接の爆撃はまぬがれたものの、1000度ともいわれる火災の熱を受けた砂岩はもろくなっていた、2日間は持ちこたえたものの、力尽きたかのように丸屋根はゆっくりと崩れ落ちていった。教会の後には焼け焦げた瓦礫の山が遺された。

戦後、多くの都市でドイツ人は街を再建するにあたって瓦礫を一つ一つ拾い集め、可能な限り元通りに再建していった。世界遺産に指定されているリューベックの古い町並みや、観光客に人気のローテンブルクなど多くの街が長い年月をかけてこのように再建されていったものである。ドレスデンのバロック建築の街並みも、ゆっくりとであるが同様に再建されていった。しかし、聖母教会はいつまでも瓦礫のままだった。一つは戦争の悲惨さを後世に伝えるため、もう一つは当時の社会主義政権が教会に対して弾圧にも近い立場をとっていたことがその理由である。

聖母教会の悲劇は戦後も続いていたのである。その困難の中で人々は再建にそなえ、瓦礫を保存し、丹念に記録を集め保管した。そして50年もの歳月が過ぎようとしていた1994年になって、統一後の新しいドイツのもとで再建が始まることになった。多くの街で行なわれた執念ともいえる再現への情熱がここでも見られた。さらに最新の技術が投入された。たとえば、コンピュータによるシミュ



再建なったドレスデンの聖母教会



瓦礫の山のまま残された聖母教会、1984年2月13日のドレスデン空襲39周年に行われた平和のためのデモに12万人もの人々が参加した。

レーションで、一つ一つの瓦礫の落下の道筋が計算され、元の位置が注意深く決められていった。

またメディアの協力も大きかった。ドイツのテレビ局は「聖母教会のために石材を一つ（もともと石材には寄付の意味もある）」や「市民があなたの街を救う」などのコピーを使い、特集番組を作るなどして広く寄付を呼びかけた。この運動にドレスデン市民だけでなく、世界中の人々が注目し、多くの寄付が寄せられた。かつての敵国、ドレスデン空襲の張本人であるイギリスからの寄付の申し出もあった。現在丸屋根の頂点に立ってい

る十字架は、このイギリスの寄付によるもので、和解の意を込めて「平和の十字架」と呼ばれている。そしてイギリスでこの十字架作成に携わった職人にアラン・スミスという人物がいたが、奇しくも彼の父はドレスデン空襲当時のパイロットだったという。

資金は決して潤沢とはいえなかったし、2002年にはエルベ川の洪水による浸水を受けたりもした。しかし多くの人びとの協力により工事は順調に進んでいった。2003年に鐘の鑄造がおこなわれ、2万5000人もの人々が式典に参加した。2004年には地上61mの高さの丸屋根の頂点に十字架が置かれた。内装の壁画は、工事の騒音を避けて深夜に描かれた。こうした人々の努力により、予算の超過もなく、当初の予定よりも1年早く完成し、2005年10月30日に聖母教会落成の大式典がおこなわれたのである。プロテスタントの教会としては珍しく華麗な内装で飾られた聖堂内に、完成を喜ぶ人々と美しい音楽が満ち満ちた様子がメディアで中継され、聖堂内に納まりきれない人々は広場でこの中継を見ていた。その映像には涙ぐむ人も多かった。

当時カトリックの国だったザクセンでは異例の豪華なプロテスタントの教会は、かつては「寛容の象徴」だった。今この教会は新しい時代のドイツにおける人びとの「和解と連帯の象徴」となることだろう。

ウォルマート発祥地 ベントンビルを訪れて

経営学部
丸谷雄一郎

ウォルマートは大手スーパー西友を傘下に有する2004年時点で世界最大の売上高2,852億ドルを誇る小売業者である。私は10年以上に渡りメキシコの小売産業を研究対象としてきたが、メキシコにおいても現地資本の小売業者最大手3社を含めた売上高を凌ぐ最大の小売業者となっている。私はウォルマートを研究対象にして以降メキシコ各地、米国国内、中国など世界のウォルマートを訪れてきたが、その発祥の地であるベントンビルを訪れたいと考えてきた。しかし、ベントンビルはウォルマートの発祥地である以外目立った特徴もない南部の田舎町であり、ついでにちょっとという場所ではないため、これまで訪ねることができなかった。2006年2月24日、10年来の悲願の1つが達成されたわけである。

ベントンビルはクリントン前大統領が知事をしていた南部の小州アーカンソー州の北西にある酪農など一次産業中心の典型的田舎町である。ウォルマート成功の主な要因は、人口の少ない田舎の市場を独占していることであるが（詳細は、拙著『変貌するメキシコ小売産業』白桃書房、2003年を参照）、ベントンビルはまさにウォルマートが標的としている田舎町の典型であり、ウォルマートのおかげで現在は空港や道も整備されてはいるが、おそらく当時は現在以上の田舎であったとみられる。ウォルマートのこの戦略を模倣している日本の小売業者も数社あるのだから、彼らが主に店しているのは北陸山陰などのいわゆる過疎地域